

京都大学	博士（教育学）	氏名	豊原 響子
論文題目	物語の生成とその基盤に関する心理臨床学的研究		
（論文内容の要旨） 本論文は、心理臨床における物語の生成とその基盤について、心理臨床学的な調査研究および事例研究に基づいて探索的に明らかにすることを試みたものである。論文全体は三部構成であり、序章と終章を含む全 12 章から成る。 以下に各章の概要を記す。 まず序章では、心理臨床実践において個別の「物語」に着目する意義を指摘したうえで、「物語」という文脈から理解することが困難なケースは“物語未満”という欠如態としてではなく、何らかの物語が生成される可能性を孕んだ“物語以前”の事態として捉える視点が重要になることを述べた。 続く第 1 部は心理臨床における物語の前提を確認することを目的とし、心理臨床における物語の生成過程とその蹟きについて論じる第 1 章と、青年期と老年期の二世帯を対象とした描画と語りに関する調査研究である第 2 章から構成された。 第 1 章では、物語とは主体と世界との摩擦のうえに生じる様々な経験を結びつけて他者に語ることで立体性や重層性がうまれるものであることを確認し、その過程で生じる様々な問題について Ingold,T.（2007/2014）が述べたラインに関する論考を援用しながら断絶や遊離、ねじれや途切れといった観点から論じ、各問題における治療や回復の方向性について述べた。 第 2 章で扱った調査研究は、バウムテストとその描画後の質問、そして人生における大きな出来事に関する個別インタビューの結果を質的に検討したものである。世代間の特徴的な差異として、大学生は空想的なイメージに基づいてバウムを描く傾向がある一方で、高齢者は実在の木を描く傾向が見出され、老年期の人々はバウムテストにおいて従来想定されてきたような自己像の投影とは異なる機序でバウムを描いている可能性が示唆されたほか、高齢者の多くが過去の体験を自発的に、時に再演するように語った一方で、大学生は調査者の質問に応じて体験にまつわる状況や情緒について語るようになる傾向が認められた。第 2 章の後半では、各世代の男女計 4 名のバウムと語りを個別的に検討し、語り手と聞き手との関係性や面接全体の流れのなかで物語ることがどのように展開するかを考察した。 第 2 部と第 3 部では、「物語」以前の事例に関する事例研究を通じて物語生成の基盤について検討することを試みた。第 3 章から第 8 章から成る第 2 部では“物語以前”の事例における主体のあり方に焦点を当て、第 9 章および第 10 章から成る第 3			

部では“物語以前”と身体との関連に着目して考察を行った。

第2部第3章では、物語の生成過程における主体のあり方に着目する必要性を指摘し、現代の学生相談において主体や主体性に関する課題を抱える学生の理解と支援が重要なテーマとなっていることを確認した。続く第4章から第7章では、筆者が学生相談で担当した青年男性の4事例に関する事例研究を行い、第8章では先の4事例に共通する主体のあり方の特徴を、未分化性、刹那性、直接性という観点から整理した。そしてそのような彼らに対して、セラピストが様々な二重性を抱えながら、即応性をもって、生身の人間として対峙することによってこそ、彼らの生きる茫漠とした世界に運動や衝突が生まれてくるのではないかと論じた。

第3部第9章は、感情の動かなさやイメージの捉えにくさを繰り返し訴えた初老期女性との面接過程に関する事例研究である。面接経過のなかで、クライアントが箱庭や夢などのイメージと現実場面の両面で身体性のテーマに取り組み、生の感情や感覚の実感を重ねたことが、分断されていた心身や自他の関係の回復に寄与し、この世に生きる基盤を生成したのではないかと考えられた。第10章は、重度の知的障害と自閉症をもつ女性との遊戯療法過程を取り上げ、“物語以前”の体験世界とはいかなるもので、いかに関わりうるかを検討した。一般に、言葉やイメージによる表現が可能なクライアントとの心理療法においては、それらが意味するもの、いわば「図」に着目することが多いが、物語以前の世界においては、意味以前の音声やリズムなどから成る「地」に着目し、セラピストもそのなかに積極的に関与し練り込まれながらも生き残ることが重要であると考えられた。

総括となる終章では、以上の議論を踏まえ、物語の生成とその基盤をめぐる三つの関与のあり方として、語りやイメージへの関与、関係性への関与、身体への関与を提示した。また、これらの基盤となるものとして「信」の重要性を指摘し、最後に本研究の課題と今後の展望についてもふれられた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、調査研究と事例研究、双方のアプローチを通して、「心理臨床における物語の生成とその基盤」について探索的に論じることを試みたものである。

心理臨床と物語は、河合隼雄が、セラピストがクライアントの悩みに寄り添い、その個人の「物語」に耳を傾けることこそが心理療法の本質であると考えたように、不即不離の関係にあると言える。そこでは、そこにあった「物語」が語り直されたり、再発見されることもあれば、思いもしました「物語」が生み出されたり、それに出くわしたりもする。そのような「物語」の生成とその基盤について論じることは、すなわち、心理療法というもののあり方を問うことでもある。

本論文において、とりわけ高く評価できるのは、以下の3点である。

第一に挙げられるのは、今日の心理臨床の場では、「物語」という視点から理解することが難しい事例も多いことは複数の研究者によってすでに指摘されているが、そのような事例を“物語未満”という欠如態としてではなく、「物語」が生成される可能性を孕んだ“物語以前”の事態として捉えることによって、心理臨床における「物語の生成とその基盤」により接近しようとした点である。ここでの豊原氏は、今日的な、すなわち、変遷するところのあり方に注目しつつも、それでも変わらない物語的な心理療法という営為の根本から目を逸らしておらず、この点は高く評価できる。

第二は、そのような心理療法の本質にかかわる論考を、自験6例を用いて行った点である。第2部「“物語以前”と主体—青年期男性の事例から—」の第4章から第7章で取り上げた4事例はいずれも、豊原氏が学生相談という臨床の場で担当した主体や主体性にかかわる課題を抱える大学生の事例である。“物語以前”と同様、そのような“主体以前”の課題を欠如態としてではなく、それぞれの事例に特徴的な「主体」のあり方、すなわち、「空虚な主体」「尻込みする主体」「振り回される主体」「逃げる主体」として描出した。第3部「“物語以前”と身体」では、「身体」を“物語以前”と深くかかわるものとして捉え、第9章では、初老期女性が箱庭や夢などのイメージや現実場面において身体性のテーマに取り組むプロセスを考察し、第10章では、重度の知的障害と自閉症をもつ女性との遊戯療法過程を通して、“物語以前”の体験世界とそれとのかかわりについて論じた。このことは、研究者としてのみならず、豊原氏の心理臨床家としての秀でた能力を示すものである。

第三は、「物語の生成とその基盤」に関連する既存の研究や自身の臨床経験からその本質を適切に抽出している点である。例えば、“物語以前”の特徴を描出するために導入した「徒歩旅行」と「輸送」に関連するものとして挙げられた用語群

(Ingold, 2007) のうち、「徒歩旅行」に関するものは、“物語以前”の心理療法について考える上で非常に有用であるし、第 10 章の重度の知的障害と自閉症をもつ女性との遊戯療法について考察する際に導入した「図」と「地」の対比は、“意味以前”の音声やリズムなどからなる「地」に着目することを可能とするものであった。その他、第 4 章から第 7 章で紹介された学生相談の 4 事例の特徴を「未分化性」「刹那性」「直接性」と定義することで、“物語以前”“主体以前”というステータスのより明確な理解を可能にしている。これらは、豊原氏が優れた実践能力とともに、多様な心的事象の本質を抽出する力を兼ね備えていることを示すものである。

このように学術的にも臨床的にも高く評価しうる本論文ではあるが、口頭試問の際には、「心理臨床における物語の生成とその基盤」とテーマを広げるよりは、「“物語以前”の心理臨床」等とテーマを限定した方がよかったのではないか、“物語以前”“主体以前”がメインの論考であるはずが、「終章 総括」は、古典的な研究が多く引かれ、やや平凡にまとめられている等の指摘があり議論がなされた。しかしながら、これらは本論文の価値をいささかも損なうものではなく、むしろ臨床心理学領域の研究者、そして心理臨床家としての著者の今後のさらなる発展のための課題とされるべきものである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和 6 年 4 月 25 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降